

国道の位置が変更となったとも考えられるが、このあたりの経緯について既書にはあまり述べられていないので詳説したい。

江戸期から主要都市を結ぶ道はあり、宮崎〜大分は豊後街道、宮崎〜鹿児島は薩摩街道、宮崎〜飩肥は飩肥街道と呼ばれた^①。とくに宮崎〜大分は江戸期と明治期ではそのコースが異なっているために、本稿では前者を「豊後街道」、後者を「大分街道」とすることで混乱を避けたい。



図8 明治32年発行
「二十万分の一地図 宮崎」部分

なお「大分街道」について公文書では「県道」^②、一般には「街道」^③と表現することがあるが、本稿では「街道」で統一する。

江戸期の「豊後街道」はおおまかには、宮崎から江平・蓮ヶ池・新名爪・広原・佐土原城下・高鍋城下を経て北上していた^④。つまり佐土原城下を経由して北上するために、新名爪〜高鍋間は現在の国道十号には一致していなかった。これは「天保の日向国絵図（一七〇二年）」、「宮崎郡御領分御引渡絵図」（図1）からも確認できる。

幕府の崩壊後、主な道はすべて「街道または往還」とよばれるよ

うになったが、ただ名称が付けられたに過ぎなかった^⑤。

明治七年に宮崎県元標が制定され、同年七月に管内道路実測が完成し、宮崎県には六主要幹線と五主要路線が定められた^⑥。道路実測が完成したということは各地を結ぶ道路を規定し、その間の距離を測定したということであり、この時点で宮崎から広瀬・高鍋を経由して大分県境を結ぶ「大分街道」が誕生した^⑦。つまり大分街道は豊後街道と異なり、山手よりの佐土原経由ではなく海岸よりの広瀬経由となり、「宮崎〜高鍋」間のコースが大きく変更された。結果的にわかることは、宮崎近隣では「大分街道は江平町から東に折れて大島村・村角村・芳士村と北上して島之内村で現在の国道十号（住吉牧場付近西側）に合流する^⑧」というコースが規定された。その道路は新たに開削されたのではなく、砂列上の既存の道路を大分街道の一部として組み入れたものと思われる。その理由は明らかではないが、廃藩により佐土原へと大きく迂回する必要がなくなったこと、花ヶ島・島之内等の湿地帯を避けたためと思われる。

明治八年に大分街道は一等道路に指定され、同九年には道路は国道・県道・里道の三等級に区分されたが、宮崎県には国道の基準に値する道路は存在しなかった^⑨。

明治九年八月二十一日、宮崎県は鹿児島県に併合された。その後、「日向地誌」の編者平部嶠南が明治九年十一月に上別府村・塩路・広瀬等の調査を行い、同誌の中でこの大分街道を「大分県街道」と記し、江平町〜蓮ヶ池から佐土原に向かう道を「佐土原往還」と区別している^⑩ことから、「大分街道もしくは大分県街道」の呼称は一般化していたようである。

鹿児島県治下の明治十三年一月に鹿児島県は管内道路分類等級を定め、大分街道は「（鹿児島）県道一等」となった^⑪。しかし、鹿児島県治下の旧宮崎県においては、ただ等級が定められただけで、道路改良の面で見るとはなかつた^⑫。

明治十六年五月九日に宮崎県が再置され、同年に鹿児島県道一等

であった大分街道は「(宮崎) 仮県道二等」となった¹⁶⁾。

明治十八年一月にそれまでの国道等級が廃され、熊田・延岡・宮崎を結ぶ国道三十六号線が規定され、大分街道は初めて国道の一部となった。そして同二十年五月の臨時県議会において道路更生費支出予算が議決され、宮崎県においてやっと本格的な道路改修工事が始められることになった。国道三十六号線の改修工事は明治二十年に始まり、現在の橋通りは同二十一年末までに開削され¹⁷⁾、全体としては同二十四年頃にほぼ終了した。しかし、「江平町・蓮ヶ池間が最後まで残った」¹⁸⁾ということからも、この改修工事終了の時点で国道三十六号線は大分街道と異なり、江平町・蓮ヶ池・島之内を結ぶ現在(北バイパス完成以前)の国道十号のコースへと変更されたことが理解できる。

明治七年に規定された大分街道の内「江平町から東に折れて大島村・村角村・芳士村と北上して島之内村で現在の国道十号(住吉牧場付西側)に合流」していた部分は、国道三十六号線の改修・開削工事終了の明治二十四年頃にはその役割を終えたが、十年近く街道としての役割を担ったためか、その後「脇往還」「間道」と呼ばれた¹⁹⁾ようであるが、今その面影は残されていない。

明治二十二年発行の「二十万分の一地図」(図7)が作成されたのはおそらく国道三十六号線の改修工事が始まった同二十年頃と思われるが、すでに江平・蓮ヶ池・島之内を結ぶ国道が描かれており、最新の国道改修工事予定の情報を共有したものと見える。

しかし、同三十二年の地図(図8)に「脇往還」を国道として描いた理由は不明であるが、この道が明治期前半に宮崎と県北そして大分とを結ぶ主たる幹線道路であったことは事実である。

正確性に欠ける輯製地図は正式測量による五万分の一地図の登場により次第に廃れていった。宮崎の五万分の一地図作成のために正式な測量が施行される前年の明治三十四年四月二十五日に陸地測量部ではなく「農商務省地質調査所」が宮崎の地質図である「宮崎図

幅」を発行している(図9)。おそらく明治期における宮崎で唯一のフルカラー印刷による宮崎の地図であるが、その存在すら一般には知られていない。基本となる地図は陸地測量部の二十万分の一地図であるが、橋橋が記入され、地質図だけに丘陵地もかなり正確に描かれ、描き方が「ケバ式」から「ぼかし式」へと変わっている。また市街地付近の地名では輯製地図には描かれていない「足軽町」が宮崎神社西側に記載されている。

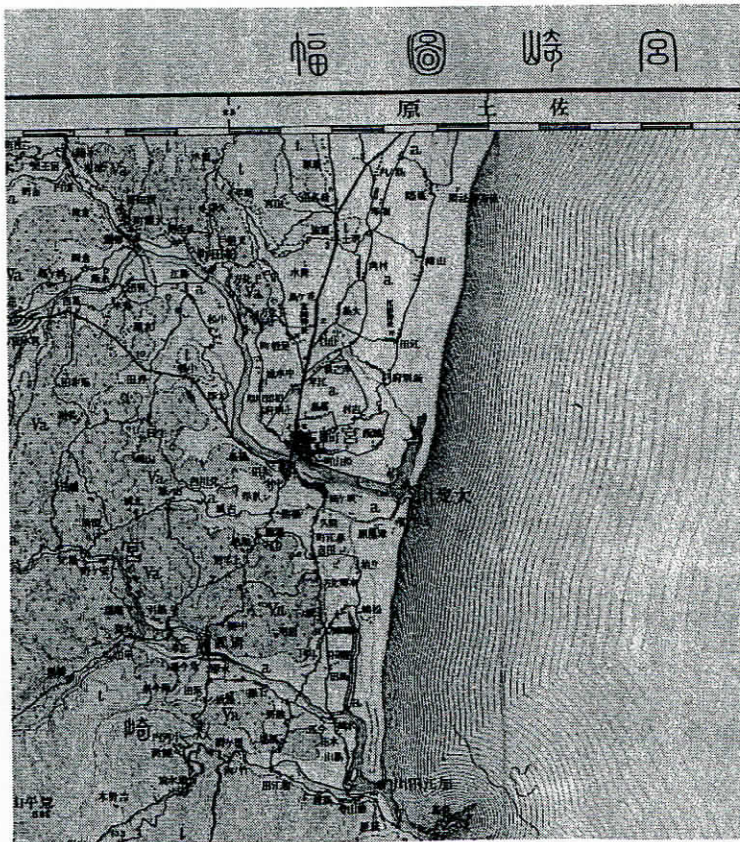


図9 明治34年発行「宮崎図幅」

この足軽町について「明治三十二年日向案内記」には「足軽町・宮崎宮の北方にあり藩制の頃足軽の屋敷跡なりと伝う」と記されている。この地図上における記載位置の正確性はともかくとして、文献上では時折登場する足軽町が実際に記載されている地図は筆者の